

風土による慈しみ

ー多摩ニュータウンの団地建て替えによる老若間交流の促進ー

Keywords

多摩ニュータウン 集合住宅 土地の歴史 畑 老若間交流

DZ21005 老沼 正翔



1. はじめに

私は多摩センター駅周辺に長年暮らしてきた。そのうえで私は多摩ニュータウンに対して違和感を覚えていた。多摩センターは、ニュータウン計画により土地の歴史が塗り替えられた街である。長い時をかけ、歴史を重ねながら変化するという過程が省略され、生まれた街であると言える。私は多摩センターでの生活が誰かによって作られ、不安定な要素などない「与えられた箱」の中で行われているように感じ、これが私にとって違和感として心の中に存在していた。

2. 研究目的

今回の提案ではニュータウン計画によって失われてしまった多摩の土地の歴史を再創出し、次の時代において多摩ニュータウンがかつての歴史を包括しながら成長し、与えられた街という印象から脱却できるよう多摩ニュータウン計画を再興することが目的である。

3. 多摩の歴史について

3.1 多摩ニュータウン計画以前の多摩の姿

多摩には、多摩丘陵という都内最大の丘陵が存在している。縄文時代から様々な人が食料を求めこの場に集まり、環状集落と呼ばれる集落が形成された。この時代には集落にとどまる人は日用品、狩りに出るものは食料を、物々交換して生きるための交流をしており、コミュニティが強固となっていた。このような助け合いと自足自給の生活が、縄文時代から多摩ニュータウン計画以前まで丘陵特有の谷戸という地形のもとで、続いていた。

3.2 多摩ニュータウン計画について

1966年、高度経済成長期により住宅需要が生まれ、東京近郊に居住環境の良好な宅地を供給することを目的として、多摩ニュータウン計画が始動した。

1971年、ニュータウン計画第一号として諏訪・永山地区の入居が始まった。この年代では住宅需要に応えるため、横に長い直方体の団地を規格化し、量産していた。多摩の過去の歴史とは関係なく効率を重視した設計が行われた。

さらに、1983年以降ではレンガやタイル調の建築が多く、西洋建築へのあこがれを強く感じる建築が多い。ニュータウン計画により、これらの建築は共有空間からプライベート空間までの緩やかな接続など様々な箇所に理想的な街としての工夫が詰め込まれているが、西洋建築へのあこがれから多摩の歴史とは関係のないアプローチで設計されていると考える。



これらの調査から、高度経済成長期以前に建設された直方体の団地とそれ以降に「時間をかけて理想的な都市を作る」をモットーに建設された西洋建築の影響を受けた住宅の二つが、現在の多摩ニュータウンを占めている。これらの住宅は多摩の歴史とは違うアプローチから設計されておりこの土地に建てられるうえで因果関係がないと考える。私は、これらが要因となり、多摩ニュータウンへの違和感が生まれたのではないかと考える。よって今回の設計では、団地の建て替えにより多摩から失われてしまった歴史を再創出する。

4. 敷地調査

4.1 多摩センターについて

多摩センター駅からは都心へのアクセスがよく、新宿まで電車で40分と公共交通機関の面において優れている。さらに多摩センター駅からは様々な大学に乗り換えなしでアクセス可能であり、都心で働く人や学生の1人暮らし先に人気である。

また、ニュータウン計画により緑地化が進み、公園が点在していることが特徴的である。このため、他の街と

比べて、休日などに外出する人の割合が高いことが特徴的である。

4.2 対象敷地：東京都多摩市愛宕 愛宕二丁目団地

多摩ニュータウン計画により多摩丘陵の多くは更地へと変わってしまった。しかし、今回敷地とする愛宕地区は多摩丘陵の地形が一部残存している貴重な土地である。さらに、愛宕地区の団地は経済成長期以前に建てられたニュータウン計画第二号の団地であり、築50年を超えている。第一号の団地はすでに建て替えられていることを考えると次に建て替えられる団地と言える。

そして、駅から少し離れていることから他の多摩ニュータウンの地域に比べ住宅が低価格である。そのため、ターゲットとしては低所得者に向けて設計するべきである。

さらに、愛宕地区は他の地区に比べ大小様々な公園、緑道があり、近くに保育園、小学校、中学校と子供たちのための施設も揃っている。これは老若間交流のためのポテンシャルを所持している敷地と言える。



図1 愛宕地区周辺広域図

5 問題提起

5.1 緑地化による公園の欠点

多摩ニュータウンには緑地化による公園が点在しているため高齢者と若者が他の地域に比べ交流が生まれやすいと予想できる。しかし同じ空間を共有しながら顔見知りの関係だけで終わっており交流が生まれていない。

5.2 交流が生まれない原因

同じ空間を共有しても交流が生まれない原因として、「きっかけ」がないことが考えられる。また、若者と高齢者では世代や常識、考え方など様々なことが異なる。

このような二世代間に交流を生み出すためのきっかけとして何かしらの作業をともに行うことが大切だと考える。作業をともにを行い、価値観をすり合わせ、少しずつ距離を縮めることが可能になる。これらの交流が生まれることで高齢者の孤独問題やそれに伴う認知症問題の解決にも寄与できる。

6 プログラム

6.1 集合住宅に居住するターゲット層

敷地調査より、今回設計する集合住宅は前提として比較的所得者が暮らすことのできる集合住宅とする。主なターゲット層は定年退職後の老夫婦、または単身の高齢者、上京した大学生による一人暮らし、子供を一人もつ三人家族世帯、子供を二人持つ四人家族世帯の4つのケースに設定する。

6.2 畑により促進する老若間交流

定年退職後の老夫婦、または単身の高齢者に畑を付与する。この畑を用い定期的なイベントを行う。そして、農作業内における畑を耕す、種をまく、収穫するという三つの時期分けてイベントを行う。高齢者は若者と農作業というきっかけを通し、交流を深める。

また子供たちと大学生という普段接点のない世代間でも交流が生まれる。地元から離れた大学生にとっても、大学外での新しい人間関係を築く貴重な機会となり、上京先にもかかわらず実家のような関係性を作ることができる。このように、畑を介して交流と助け合いの循環がうまれる。

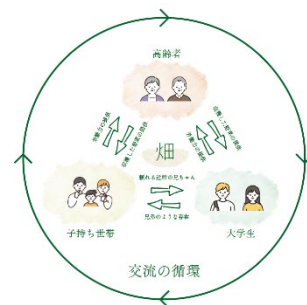


図2 畑による促進する交流の輪

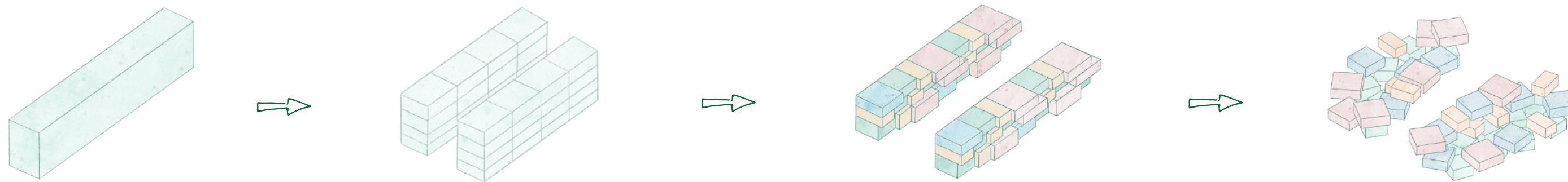
6.3 生きるための交流

高齢者は農作業が楽になる若者の労働力を提供してもらおう。そして収穫の際には、手伝ってくれた若者たちに収穫物の一部を分配する。低所得の方々に食料を提供し、高齢者には労働力、と相互に利益を得る関係を築くことができる。

このように縄文時代からかつて存在していた需要と供給から生まれる、生きるための交流を現代において再興することでコミュニティをより強固にする。

参考文献

- 1) 北条晃敬：『多摩ニュータウン構想の全貌』多摩ニュータウン歴史研究会, 2012年12月25日, 175ページ
- 2) J-STAGE：多摩ニュータウンにおける街区公園の利用実態と公園の評価に関する研究,
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jila1994/63/5/63_5_653/pdf
- 3) 東京都市整備局：多摩ニュータウンについて,
<https://www.toshiseibi.metro.tokyo.lg.jp/bosai/tama/top.html>



高度経済成長期に建てられ規格化された既存団地

既存団地を住戸単位で分割し、さらに団地内に共有空間を設けるため2棟へ分割する

個々の住戸面積をターゲットの世帯ごとに変形させる

様々な視線の抜けを生み出すため、柱が上下階に通るよう角度をつけ住戸を配置する

